

---

# モンハンの世界？

まいあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

モンハンの世界？

### 【Nコード】

N4199V

### 【作者名】

まいあ

### 【あらすじ】

ある日目が覚めるとハンターだった：

MHFの世界に突如来てしまった主人公の運命は！？

異世界・チートで性別も変わっちゃって悩む主人公に道は開かれるのか！？

別ブログ「マイアの日記」も更新中ですW良かったら見に来てくだ  
さいm ( m

## プロローグ（前書き）

初めての作品になりますので、宜しく願います。

## プロローグ

目が覚めると大きな広場の入り口に立っていた。広場のは中央がくぼんでいるらしく、全容は見えないが路店が広がっているのか大勢の人の話し声や自分の店に客を呼ぶ声が聞こえる。

：たしか昨日は仕事を終え帰宅したあと書類整理の疲れもあり早々に寝てしまったような気が…？寝ぼけて変なところに来てしまったのだろうか？いやっそれはそれで問題があるが、まずはここはどこだろうと悩みながら、人のいるらしい所へとゆっくりと歩き始めると体から『ガシャ』っと音が出た。何の音だろうと手を見ると…肘まで伸びた白い手袋？白い西洋風な甲冑？甲冑からのぞく白い肌に細い腕、肩まで伸びているらしい金色の髪……へっ？『なにこれ？』

思わず声にだすと、聞いたことがない高い声！？

えーっと、夢ですね？はい、わかります。と自己完結し周りを改めて見て、よく考えると広場の入り口にカウンターがあり紫色の服をきた綺麗なお姉さんがいる。

「あの、ここどこでしょうか？」

と聞くと、お姉さんは不思議そうに顔を傾げて

「ここはメゼポタル広場ですよ。ハンターさん♪」

と陽気に答えたくれた。メゼポルタ広場！？…ここモンスターハンターフロンティアだ…そう言えば仕事が終わった後の楽しみと言えば、最近始めたこのゲームで やっと欲しい防具が揃ったばかりだった。自分の格好をもう一度見直すとメインで使用しているリアル装備と背中に感じる重量はおそらくメイン武器である対竜武器の大剣エンドブレイカーだろう。自分の装備の重量がわかるなんてリアルな夢だなぁと考えていると、

「もしかして新人ハンターさんですか？もしそうならギルドに加盟して新人研修する施設がありますよ♪そちらにいるアイルーさんが案内人ですので話をしてみてもいいですか？」

と笑顔で教えてくれたので、お礼をいって教えられたところへ視線を移すと、いたよ・・・アイルーが。

アイルーとはハンターに飼われている二足歩行するネコであり、数多くの愛好家がいるマスコットキャラクターで言葉の後に『にゃ』をつける憎めないヤツもある。このネコはときにハンターの食事を作ったり、狩りに必要な情報を教えてくれたりもする万能なネコである。

近くによるとこちらに気づいたらしくアイルーが振り返った。

「初めまして可愛いハンターさん。メゾポルタ広場は初めてかにゃ？」

と尋ねてきた・・・なにこの可愛い生き物！思わず頭を撫でなくなった気持ちをかろうじて抑えつつリアルな夢だなぁと考えながら、この可愛い生き物の言葉をよく考えてみると30を過ぎた『お兄さん！』に向かって『可愛い』は無いだろうと心の中でツツコミを入れながら夢だしなぁと思い直した。それでも表情には出ていたらしくアイルーは申し訳なさそうにし、

「もしかして初めてじゃないかにゃ？僕は一度あったハンターさんのことは忘れないつもりでいたけど、もしあったらゴメンにゃ」と俯いてしまったので、慌てて初めましてと伝えると嬉しそうに顔をあげながら

「よかったにゃ！もしかして失礼なことを行ったかと思ったにゃ」と喜んでいた。来たのは初めてだし嘘ではないよなと自分に言い聞かしながらどうしていいかわからないと相談するとアイルーは胸を張り嬉しそうに新人ハンターが集まるギルドとかが経営している猫

団へ連れて行ってくれると言いき始めた。

随分と長い夢だが、楽しそうだったためもう少し覚めないで欲しいと考えながらアイルーの後ろについていくことにした。

## プロローグ（後書き）

まだ投稿の仕方も分かってませんf^\_^  
気長に見て下さい



## 新人獵団（前書き）

仕事が忙しく執筆が遅いですが、頑張ります。

## 新人獵団

とっても可愛らしい（↑強調！）アイルーについていくと街の外れにある集落へとついた。集落の中央には焚き火の跡があり、その周りには雑貨を扱っている店や食堂らしい所があり人も様々活気づいている。ふと気づくと自分のような装備は見あたらずイヤクク素材の防具や粗末なチェインアーマーを着ている人が多いのに気づいた。

周りを見ながらほうけていると数歩前のアイルーが振り返り「あとは頑張るにゃ」といい元来た道へと戻っていった。アイルーにお礼を言おうと嬉しそうに笑顔で応えてくれた。マジで抱きついてスリスリしたい衝動を抑え

振り返り、入り口にある受付らしいお姉さんに声をかけた。「かわいいアイルーさんに連れてきてもらいました。初めてで何も分かりませんが、宜しくお願いします。」とお辞儀をすると「ようこそ！歓迎しますよ。ところでお名前は？」と聞かれたので、ゲームで名付けている『マイア』と名乗ると

「改めましてはマイアさん。只今ハンター登録を完了しました。ハンター許可証を発行するには、この新人獵団で狩猟、採取などを覚えていただいて最後の試験を完了してからお渡しします。それまではここでもしかクエストを受けられませんので注意をしてください。あとクエストに行くときは教官も同行しますけど、ここにいる他のハンターさんとも行っても構いません。頑張ってくださいね」

と笑顔で説明をしてくれた。確かに周りを見ると粗末な鎖帷子やイヤククらしい装備を纏ったハンターが大勢いた。

入り口にいてもしょうがないと思い露天を見に歩いていくと、様々な視線を感じたが気のせいだろうと露天のおばちゃんに「オススメちようだい」というと、好きな食材から選んで良いよ！って言われ

たけど：見たことない食材ばかりだったので、奥のテーブルで食事をしている人と同じものを頼み空いているテーブルへ移動した。おばちゃんが作っている所をみると、変な虫とジャムを出して鼻歌混じりに料理をしている。　：きつと大丈夫だよね：

しばらく待つとホットケーキに似た物が出てきた。さっきの食材から、どうしてこんなのが出来るのだろうと恐る恐る食べてみると、凄く美味しい！さっきの食材のことなんて忘れて一気に食べてしまった。

さてお勘定をって考えたら、お金ドコ：慌てて財布を探すと腰の裏にある袋に入っていた（かなり安堵）。通貨の単位が分からないためおばちゃんに袋を広げ「お金ここから取って」と言う「お金もちなんだね。」と言いながら硬貨を数枚抜いた。

本格的に何をして良いか分からず広場の中央にいくと3人のハンターがいた。片手剣、ハンマー、大剣を装備しておりいずれも金属と言うより「骨」の装備のようだった。防具は全員粗末な鎖帷子をつけているが、どこか楽しそうにモンスターとの武勇伝を語り合っている。その話を見つめていると大剣を背負った背の大きいハンターが近づいてきた。

「よう！あんた見たことない装備してるな！ここにいてってことは新人ハンターなんだろう？」

と聞かれたので、

「さっきギルド登録したばかりです。装備は：親の形見なんです」と嘘をついてしまったが、夢とかゲームとか言うよりマシかなっと思っただ。

すると大剣のハンターは頷き

「あんたも大変だな。もしよかったらこれからイヤンクック討伐に行くんだが、一緒にいかないか？その：無理はしなくてもいいんだが：」

と親を亡くしたばかりの傷心の少女に語るように話して来たため、

つい騙しているような気がして行きます。と答えると大剣ハンターは嬉しそうに

「そうか！俺の名前はマーティーだ。同じ大剣使いだな。宜しく！さあ仲間を紹介するよ！」

と広場の中央へ手を引かれていった。

## 出会い（前書き）

小出しですいません m ( ) m

## 出会い

大剣ハンターのマーティーに連れられ広場の中央にいくとマーティーは改めて自己紹介をしてくれた。「俺の名前はマーティー。見ての通り大剣使いだ。こっちは片手剣のヒューイ。そっちで座ってるのがハンマーのギルスだ。」

と言うと、片手剣使いが会釈をした

「僕はヒューイ。いまマーティーからあったように片手剣を使っているんだ。いつかレジェンドと呼ばれる英雄を目指している。これから宜しく！」

と握手を求めてきたため手を差し出した。座っているハンマー使いは目線だけこちらに向け

「ギルスだ。宜しく。」

と短い挨拶を送ってきた。嫌われたかなと思っているとマーティーがあいつは人付き合いが苦手なだけで良い奴だよとフォローしてくれた。

4人のフルパーティーは久しぶりだなとマーティーはいい、準備が出来次第出発すると言った。準備をどうしようかと悩んでいると片手剣のヒューイが道具屋に案内してくれると言ってくれたので大人しく従った。

道具屋は広場の中央から川側に近いところにあり、見たことがない薬品のようなものから食材らしき乾燥物、銃に使う弾まであった。ヒューイが言うには、これから狩猟に行くイヤンクックは攻撃力が高く敏捷性もあり初級のハンターでは難しいモンスターのため回復薬を買うことを勧められたため腰のポーチに入るだけ買うことにした。ヒューイが言うには今まで3人のパーティーでイヤンクックを3回狩猟したことがあるらしく、今回も大丈夫だよと優しく話してくれた。

道具屋のおじさんから買ったものを受け取りふと川を見るとあまり

に澄んだ水が流れているため近づいてみると、かなり水が綺麗らしく川底まで見えた。その様子をみたヒューイが釣りの話をしてくれていたが、私の耳には届かなかった。川に映っている自分の姿を見て…。

そう。まさしく美少女と言える細身の女性がいた。髪は肩まで伸びており、長い髪が目に入らないように赤い髪留めを付けている。身にまとう鎧は白銀であり、背に黄金色を纏った大剣を背負い自分を見ている。

白い肌の顔立ちは綺麗に整っており、何故かその姿は戦乙女を思わせた。

ついこの川面に人がいるのではないかと恐る恐る水に手を入れると澄んだ冷たさが伝わってきた。

「…冷たい」

つぶやく私に「もうそろそろ寒冷期にはいるからね」とヒューイが答えていた。

…もしかして、現実？と不安と期待が脳裏を横切ったが、ヒューイと私を呼ぶ仲間の声に広場へ戻ることにした。

## 怪鳥遭遇（前書き）

P C から投稿してみました



## 怪鳥遭遇

マーティーの話によると目指すイェンクックは密林にいるらしく、そこまではギルドが用意する竜車に乗って移動するらしかった。準備を終えクエスト発注所についていくと草食恐竜の馬車を用意してあった。初めてみた竜は高さ2mほどあり、爬虫類のような肌をしているが目は優しかった。この子なら乗れそうかなと「たのむよ」と恐る恐る頭を撫でると嬉しそうに竜がないた。竜車は幌つきで、中の広さは6畳程度だが4人と装備を載せると少し手狭に感じた。ヒューイが言うにはハンターのランクによって竜車の大きさも変わるというから、彼が言うレジェンドとなると金襴豪華な物かもしれないと想像した。

全員が乗り込むと竜車がゆっくりと歩き始めた。ゴムのタイヤのなこの世界では木の車輪の周りに粗末な鉄を巻いているらしく、乗り心地は決して良いとはいえないがこれから狩りに行くという高揚感で気にもならなかった。さっきまでは夢でないとしたら・・・と考えていたが、「目の前のことを精一杯」を心情としていた私はとにかく現状を見つめ、精一杯楽しもうと決意をした。

竜車に揺られながらこれから行くであろう密林がはたしてゲームと同じMAPなのだろうかとか、自分のステータスはどのようなのだろうかとか考えながらマーティー、ヒューイ、ギルスの3人をぼっと見ていると不意にギルスが話しかけてきた。

「初めて行くクエストで浮かれているようだが、着くまでに武器の手入れはしっかりしたほうがいい。敵対して切れないでは周りに迷惑がかかるからな」

と目線も合わせず言ってきたので、慌ててポーチから携帯砥石を取り出したが、、、剣なんて研いだことないです・・・ハイ。ややしばらく大剣、砥石とにらめっこをしていると、マーティーが砥石を

持つて

「俺のは終わったからやり方を教えてやるよ」

と言うと立ち上がり始めていたヒューイがチェット口を鳴らし、また同じ場所へと腰を下ろした。

もしここにいる事になるなら必須のことなんだろうと聞くは一時の恥、聞かぬは末代の恥との会社の先輩の言葉を思い出し目的地に着くまで3人の仲間に武器の研ぎ方、アイテムの使い方、モンスターの種類などを教えてもらって行った。

竜車に揺れること2日が過ぎた朝に目的地である密林のベースキャンプへと到着した。ベースキャンプはギルドが用意してくれているハンター用のキャンプ施設であり、薪火をする場所や簡易のテント・ベットが備え付けられていた。マーティーの話によると初心者猟団で来る密林は比較的近いため、熟練のハンターになると狩場までの距離が長くなるとも教えてくれ、ベースキャンプに余分な食料や調理器具を置き密林へと入っていった。

密林はテレビでしか見た事がない亜熱帯のジャングルを思わせる木々と葉に覆われており、ハンターや彼らが言うモンスターが歩く程度の獣道しかなかった。ここに来るまでの会話で私が本当に初心者であり、これが初のクエストと知りギルスが不機嫌になり、マーティーは先生みたいになっていたため密林での隊列はマーティー、ギルスを先頭にし私とヒューイはその後ろを歩いている形になっていた。それまでお喋りしていたマーティーとヒューイもさすがに密林の緊張感からか、寡黙になっている。気温はおそらく30℃以上で湿度は80〜90%かなと思いつながら歩いていたときに木々の向こうに動く影が見えた。良くみてみると青い鱗を持った二足歩行の爬虫類・・・ランポスだ・・・。ランポスは1頭のように遠くからこちらを見ているだけのように見える。

隣を歩いているヒューイにランポスがいることを告げると気づいて

いなかったようで慌てて腰の剣に手を伸ばしたが、かなり遠くにいることを確認すると、息を吐き「あれだけ離れていてこっちにこないところを見ると、まだ警戒しているみたいだから大丈夫だな」といいマーティーもギルスもそれに同意した。これから始まる怪鳥イヤンクックとの戦闘を前に極力体力を消耗したくないとの答えを出し、その場を離れた。

1時間ほど山らしき斜面を上がっていくと丘に出た。丘からは眼下に先ほどのベースキャンプと澄み渡った海が見えるが、高さとする<sup>と</sup>2〜30mほどあったためあまりがけに近づかないよう景色を楽しんでいると

「いつもここらへんにイヤンクックが現れるんだ。武器を抜けるようにして置けよ！」

と怒ったような口調で言ってきたため少し気を抜きすぎたと反省し、素直に肩に担いでいる大剣を確かめた。

その時だった。羽ばたく轟音と共にいま来た崖下からの通路の上から赤い羽根をもち、大きく鋭い嘴<sup>クチバシ</sup>をもった怪鳥が目の前にその羽かが織り出す風と共に降り立ったのだ！

『ギョウワエエー！』

赤い怪鳥は今まで聞いたことがない奇声を上げて威嚇してきた！

怪鳥遭遇（後書き）

駄文ですいません m  
〔  
m

## 初戦闘（前書き）

初の戦闘シーンを描きました。かなり分かりづらいと思いますが、生暖かい目で見守って下さい。

## 初戦闘

甲殻類的な赤い鱗、その巨体を浮かせる事の出来る翼、爬虫類の様な巨大な尻尾、大きいと言うには大きすぎるクチバシ、エリマキトカゲのようなトサカ、そして生きていることを強調する猛禽類のような目：そこにいることが当たり前のような堂々とした佇まいに、いのまれた。正直、高々夢だろう。所詮はゲームと思っていたが、全てを否定された気がした。怪鳥と呼ばれるイャンクックを甘く見ていたのあったと思う。それがただイャンクックに『会った』ただそれだけで全てこれが真実なのだと思い知らされた感じだった。ゲームではわからない怪鳥の皮膚の動き、呼吸。見とれているとハンターである仲間たちが散会しイャンクックに向かっていった。左から片手剣のヒューイが、右側の死角のはずの場所にハンマー使いのギルス、そして私とイャンクックとの視線を遮るように大剣使いのマーティーがそれぞれが襲いかかった。

「なにをボケツとしてやがる！早く動け！」

とマーティーの声が聞こえたが、

「当てにするな！吞まれてるっ！」

と誰かの声が聞こえた。

イャンクックは元々好戦的なモンスターなため、自分に向かってくるハンター3人を敵として認識したらしく。素早い動きでチョロチョロとするものに尻尾を回し当てていた。右から向かったヒューイはあくまで牽制のつもりで向かっていったため、イャンクックの尻尾の動きを読み盾でガードしていたが、正面から大剣を振り下ろそうとしたマーティーには直撃をした。マーティーはクチバシに狙いを定め大剣を上段より振り下ろしていたが、不意に右からの衝撃で体を宙に浮かせた。その間にギルスは彼の武器、骨で出来たハンマーで怪鳥を攻撃するが、翼に弾かれ後ろへ下がっていた。イニシア

タイプはイェンクックが取ったかに見えた。まるで高画質、高性能な映画を見ているように私はそこから動けないでいた。現実と解つていてもハンターと怪鳥が織りなす命のぶつかり合いに見惚れていた。

片手剣のヒューイが飛びながらの斬撃を与えようと地面を蹴り、マーティーは大剣で足をなぎ払おうと、ギルスは力を溜め強力な一撃を与えようと。怪鳥はその何撃かを身に受けながらクチバシで、尻尾を回して反撃をしている。イニシアタイプは取られたものの、その後の建て直しをし連携しながらの攻撃に怪鳥は徐々にその命を削りとられていた。その時だった。傷ついた怪鳥は口から火球を正面から切りつけてくるマーティーに向かって吐き出した。：死の予感がした。マーティーが着ているのは作りが雑ともいえるただの鎖帷子であり、今までの戦闘で正面から向かっていつているマーティーも無傷では無かった。剣を振り上げ怪鳥を攻撃しようとしていた戦士はかろうじて己の武器である大剣を自分の前に横に出すことでガードを出来たが、火球の勢いを押さえきれずに後方へと吹き飛ばされ体制を崩された。

そこに、もう一度怪鳥は今までで最大級の火球をマーティーに向かって吐き出した。きつと怪鳥は勝利を確信したのだろう。実質ヒューイ、ギルスも今までのように援護攻撃もせず顔に驚愕の表情を浮かべマーティーの方へ駆け出して来ていた。そのマーティーは後ろにいた私を巻き込まないよう『逃げろ！』と叫んでいた。私は今まで剣は使ったことは無かった。現代社会において剣を使う、または剣を振るう人間などそれを趣味や仕事とするもの以外は殆どないだろう。しかし、私は学生時代に無手の護身術をしていたため、体が勝手に動いた。反射的に動いた自分を『素手じゃ止められないでしょ』と突っ込みを入れたくなっていた。

しかし、私は自分の期待を裏切り背に背負った大剣で迫ってきていた火球を受けていた。火球を受けた瞬間『飛ばされる？』と考えたが、そこまでの衝撃は来なかった。今まで何もせずただ立ち尽くし

ていたはずの新たな敵に怪鳥は怒りを露わに突撃してきた。後ろにいるマーティー、こちらに駆けてくる二人の間もスローモーションに見えていた。私は大剣を振りかぶり力を溜めた一撃を、ちょうど私の方へ向かってきていた怪物のクチバシへと狙いを定め振り下ろした。

パギヤ

鈍い音と軽くなった感触が手に伝わってくる。そのまま地面に刺さった大剣を切り返し、今度は下から上へと切り上げた。狙いは違わす怪鳥の翼を切り裂き、とどめに頭に最速の振り下ろし切りを落とすと、存在感を発していた存在。イヤンクックはその場に音を立てて崩れ落ちた。

動かなくなった怪鳥を見つめ、これはやはり現実なんだと自分に言い聞かせていると

「見えなかった」

というヒューイの声が耳に入った。



## 初戦闘（後書き）

表現って難しいですね…でも頑張ります！

葛藤（前書き）

暫く忙しくなりそうです（泣）

## 葛藤

いままで自分たちが一番強いと思ったことはなかった。上には上がいる。たとえばレジェンドと呼ばれる生きながらにしてギルドに認められているごく少数のハンター以外にももちろんいることは知っていた。たとえ新人猟団でイャンクック討伐をハンター登録後数週間で達成し、新人猟団記録を塗り替えている自分たちでもだ・・・。

ヒューイがハンターになろうとしたきっかけは子供のころ親を喜ばせようと特産キノコを採りに行った時にモンスターと遭遇し死を覚悟した時に一人の初老のハンターに助けられた時だった。その時に見たハンターの戦いは今なお眼を閉じれば浮かんでくる。片手剣をもち雌火竜をたった一人で討伐した雄姿が・・・。後にそのハンターが片手剣のレジェンドと呼ばれていることを知り、自分もいつか人を守るハンターになろうと修行を初め16歳の時に村を出てこの新人猟団に来たのだった。

猟団に入った当初周りは新人ハンターばかりだったが教官をはじめこの猟団を出ていま1級の上位ハンターになった先輩たちとも狩りをする機会があり、諸々と学ばせてもらった。片手剣、双剣、ハンマー、槍、大剣、狩猟笛、ガンランス、ライトボウガンそれら全てを見て学んだつもりだった。

しかし、いま目の前で起こったことが理解できなかった。もちろん大剣を見るのが今日初めてというわけではない。大剣というのはその重い重量で相手を粉碎するためスピードよりも威力を重視している武器であり、自分が持っている片手剣に比べ鈍重なイメージすら持っていた。それだからこそ理解が出来なかった。速度に慣れた自分が遠く離れているはずの大剣使いが振った剣の軌道が見えなかったのだ。大剣使いは最近腕を見込んで仲間に入ったマーティンでは

ない。つい先日仲間に入れた剣の研ぎ方も知らない素人だ。装備こそ充実しているが親の形見らしくその動きはハンターとは見えなかった。あれがフェイクだとしたらすごい人間だとも思う。戦闘が始まったときでさえ初めて見たであろうイャンクックの威嚇で一步も動けずにいたのだ。それがなぜ？自分を否定されているかのような錯覚を覚えていた。これが夢であるならとも思うが、先ほどの戦闘で腹部に受けた傷がそれを否定する。

これが才能と言うなら神を恨もうと思った・・・。

マイアは目の前で絶命している怪鳥を見た。翼は無残にも引き裂かれ腹部と頭部からはその臓物が出ていた。今まで虫くらいしか殺した事がなく、食材はスーパーでパックに入っただけのしか見たことがない現代人が初めて自分で息を止めた生き物を見て吐き気が止まらなかった。ゲームの中ではどんなに乱撃を加えても体の一部のディテールが崩れるだけで、どこが残酷な描写なのだろうと思っていたが現実とは違っていた。思わず手にしている大剣エンドブレイカーを落とし、その場にうずくまって・・・なぜか泣いていた。

そんな新しい仲間を見ているマーティは驚愕の表情から我に返り、わけもわからずマイアに話しかけた。「すげえなコレ！おまえ新人って言ってたけど何かやってたんだな！それならもっと早く動いてくれりゃよかったのに！・・・あれか？俺たちを見極めようって魂胆か？」とふざけ半分で言った時に少女の涙に気付く激しく狼狽し、おろおろと慰め始めた。

そう、これは夢ではなく真実でありこれからがはじまりであることに気づき、この世界で自分がどうすればいいのかの答えを迫られたのだと気づいたから・・・。

## 葛藤（後書き）

モンスターを倒した時に嬉しいかなあ・・・て考えた時に、リアルで起こるところなるかなって考えながら描いてみましたが、描写がわかりづらくてスイマセンm（mもって頑張りますへへ；

## キャンプにて（前書き）

こんな小説をお気に入り登録してくれたり、ポイントを入れて下さ  
って感謝します（≡▽≡）

## キャンプにて

倒したイャンクックの素材を剥ぎ取っているときも白い鎧の大剣使いである少女はうずくまっていた。時折此方を見たりもするが、すぐに目を反らしてしまう。気を使っていたマーティーも素材が欲しかったらしく今は隣で剥ぎ取りを行っていた。よく考えると不思議な少女だった。年の頃なら自分と同じ位だから15〜17位だろう。装備を身に纏い佇む姿はハンターを思わせるが、狩りは初めてらしく採取すらしたことがないと言っていた。砥石の使い方も知らないが大剣の使い手としては恐らく上位ハンター並かそれ以上。そしてハンターなのに倒したモンスターの剥ぎ取りもせず俯いている。なによりハンターとして、剣士としても華奢でありとても大剣を持てるであろう体つきをしていないのだ。通常女性ハンターは男よりも過酷だ。もともとから無い筋力を鍛えモンスターが生息する地へ向かうのだから、当然体つきも変わってくる。彼女が持っている大剣を持たせて貰ったが、例え男であってもあれを振り回すには相当の筋力が必要なはずなのに鎧の下までは分らないが、鎧から見えている肌は透き通るように白く、細く、美しかった。顔にも傷は無く凛と整った顔つきはすれ違う男の大半を振り向かせるだろうとも思う。正直自分もハンターとしての腕前よりも無骨なパーティーに華があればくらいで仲間に入ること了承したのだ。さそったマーティーはそんなことまで考えている様子はなかったが…。

そこまで考えてヒューイは思考を止めた。とにかく自分を努力をしなければと。今回狩ったイャンクックはビックサイズだったため、念願のクック装備をみんなと揃ってつくれそうなことを素直に喜ぶ様にして、横で剥ぎとった素材を親切心で渡そうとしているマーティーを無言で諫めた。彼女の表情から生き物の素材に対する嫌悪感が見えたからだ。

この不思議な少女がどうなるのか、またハンターとして育てるための方法を考えながらベースキャンプへと戻ることにした。ベースキャンプから猟団のキャンプへ戻る竜車に揺られながらマイアはこれからの事について悩んでいた。

選択肢は数通りあった。一つ目はキャンプに戻り次第パーティーを抜け街か村を探しそこに住むこと。これは自分が比較的金に余裕があるらしい今なら可能であるし、一番危険が少ない。二つ目は違う強いパーティーを探し守ってもらうこと。ただし強いパーティーに入れば相当のモンスターとも戦うはずなので危険も伴う。三つ目はこのパーティーでハンターとしての生き方を学ぶことだった。

考えがまとまらないまま竜車はキャンプへと到着した。マーティーたちはクック装備が造れると喜びながら足早に工房へ行こうとして荷物である素材をまとめていた。私はそんな様子を見つめながらキャンプ内を探索してみることにした。ゲームの中では篝火を中心に小さなキャンプというイメージであったが、実際の場所は様々な店や食堂が並び如何に自分の店に客を呼び込もうかと賑わっていた。ハンターも大勢いてまるでお祭りだなあと喧騒の中に行つて見ることにした。

喧騒の中に入ってみると、レウス装備をしているハンターやクシャルダオラ装備をしているハンターも極少数だが発見し、H R 1 1以上は入れないとかゲームの中だけなんだな〜と考えながら歩いていると、つい向かってきている人にぶつかってしまった。余所見をしなければと慌てて誤ろうとしたが、クックメールを着た巨漢の戦士が突然「いでええええええ！」と言って地面に倒れこんでしまった。

確かに鎧の肩から相手の腕に当たってしまったが（私のほうが背が



低い腕に当たった）、私が着ているレアル装備の肩当は別段角や棘があるわけではなく、なにより相手の腕を破壊した感触はなかったため、どうしたんだろうとぶつかってしまった戦士の腕を看ようとした時、戦士の仲間らしい茶色のゲネポス装備をしたハンターがこちらに向かってきた。

「おい！おまえ！何てことをしてくるんだ！これから初めて雌火龍を狩りに行こうってしてただぞ！」

と顔を赤らめて怒鳴ってきた。

「やつ・・・あの・・・なんともないと思うんですけど、私にぶつかったことより自分で転んだときに打った膝のほうに痛そうですよ？」

そう、私は彼が自分から倒れたのは分かっていた。  
だが証拠がない。

「てめえフザケンナヨ！俺の相棒にぶつかって怪我までさせた挙句わざとぶつかったっていいてえのかよ！？」

「ちょっとコッチこいやっ！」

と突然手を引っ張ってきたが・・・ホンキデスカ？って位ヨワヨワしい・・・？黙って手を引かれるのもヤダなあとその場で我慢？している

「てめえ！抵抗する気かよ！」

と手をつかんでいた逆の手で殴りかかってきた。厄介ごとって勝手にくるんだよねと思いつつ、拳を払いのけようとしたときゲネポス男の手が突然掴まれた。

「女の子相手になに粋がってるのさ！」

と掴んだ主はその腕を間接の逆側にひねり上げそのまま男を投げ飛ばし、クック装備の男に

「そこでさっきから倒れてるアンタ！本当に使えない腕に破壊してあげようか？」

と優しく声をかけた。その騒ぎを聞きつけたのか男の仲間らしい男

共が集まってきた。あたりのハンターは私たちを中心にわざわざ道を空けステージを作ったようで「やれやれっ」とか「姉ちゃん負けんよ!」とか無責任なことを喚いている。野次馬の内側を囲んでいる奴等の仲間は武器に手を掛けながらこちらへギリギリと近づいてくきていた。隣を見て助けてくれた人を見ると年のころはそう変わらない薄茶色のショートカットの女性がいた。

って言うかさっきも今も近づいていることに気づかなかった。足の運びや呼吸から見た目からは想像できない達人の香りがした。

「ねえアンタたち。ここで武器を抜こうって言うの? 丸腰の女の子2人に大の男が大勢でね……。ここでの不文律を知らないってことはあんた達新人かただのチンピラだね?」

といい、丸腰にもかかわらず女性は周を囲んでいる男共に向かっていった。戦いは一方的だった。その女性は関節技を知っているらしく、武器を持っている男に投げつけるを繰り返していた。私のほうにも腕を碎かれたはずのクック装備男が元氣良く腕を振り降ろしてきたので、その腕を掴み、勢いを殺さないよう引きながら懐へ背を向けながら入り腰を跳ね上げた。背負い投げである。優しい私は彼が嘘つきにならないようにチャンと引き手を離してあげた。

・・・2mは飛んで肩から落ちた彼を確認すると、女性のほうも終わったらしくこちらへ向かってきた。

「災難だったね。いつの頃もあんなのいるんだね。あんな腕で雌火竜のところに行ったら瞬殺されちゃうよ」

と、どこから持ってきたか分からない布で自分の拳を拭っていた。「助かりました。ありがとうございます」と頭を下げると「もしかして必要なかったかもだけどね。」と舌をペロっと出して笑った。

「新人さんの動きに見えないけど、見たことないってことは新人さんだよな? 私はここの卒業生なんだ。たまに遊びにくるんだけど、

か弱い女の子が襲われてたから余計なことしちゃった。よかったら  
お詫びに飲み物でも奢らせてよ。」

と笑顔で言ってきた為

「助けてもらったんだから私が払います！」  
と言うと

「じゃあ、宜しく。私の名前はアヤノ。アヤノⅡテンマだよ。よろ  
しくねっ」

と小悪魔っぽく笑いながら握手を求めてきた。

## キャンプにて（後書き）

会話の表現って難しいですね。・・・でも、頑張る！

## アヤノ（前書き）

お待たせしましたm  
〔  
m

## アヤノ

アヤノⅡテンマと名乗った女性に手を差し出され、自分が自己紹介していなかったことを思い出し慌てて手を握り返しながら

「えっと・・・マイアです。助けてくれてありがとうございます。」

見てのとおり新人のハンターです」

と自己紹介をすると

「ふーん。見ての通りね・・・そこら辺の上位を名乗ってるハンターより出来そうだけど」

とつぶやき、立ち話をなんだからと近くの軽食屋のような所へ行くことにした。

軽食屋につくとアヤノは給仕のお姉さんに適当に冷えたもの持ってきてと言い、こちらへ向き直った。

「マイアさんだっけ？まず私のことはアヤノでいいよ。私はマイちゃんって呼ばせてもらうから」とウィンクを飛ばし、照れた私に意地悪そうな笑顔を見せた。

「・・・じゃあ、アヤノはハンター生活は長いんですか？」と聞くとまだ一年くらいと教えてくれた。

「マイちゃんが着てる鎧って、どこからもらったの？もしかしてレアルキットじゃない？」と急に真剣な眼で聞いてきた。

レアルキット。それはオンラインゲームであるモンスターハンターフロンティアで課金装備といわれるものだった。私はそのレアルキットの白色の鎧を身に着けている。ただ、この世界に付いてからは一度も課金装備を見たことがなかった。

しかし、自分がまだ見たことがないだけで誰かが持っているかもしれないと思い、その言葉を肯定するとアヤノは驚き、言葉を選びながら話しかけてきた。

「マイちゃん。今まで色々あったと思うけど、今はこれが現実。自

分がこれからどうして行くかをじっくり考えて行動したほうがいいよ。マイちゃんのスキルはきっと自分で思っている以上にあるからね。

でも、決して無理はしないで。」

といい、何かあればとアヤノの所属している獵団への連絡先を教えにくれた。

頼んでいた軽食と飲み物が来た為しばらくアヤノと仲間のことをなどを歓談し楽しんでいると、店の外が騒がしくなってきたのに気づいた。アヤノはまた喧嘩でしようね。といって丁度紅茶を飲み干している所だった。また巻き込まれるのではと不安に思っていると、見透かされたようで

「だいじょーぶだよ。いくら変なのが多いっていつでも1日に2回も3回も巻き込まれることなんてないからさ」

と笑顔で言ってくれたため、頷き表に出ると人だかりが出来ていた。どうやら中心部ではまた喧嘩が起きそうだと野次馬のハンターが教えてくれた。君子危きに近よらづとは先人が残した重要な言葉ではあるが、何があっただろうと覗き込んでいると

「そんなところじゃ見えないよ。もっと前に行ってみよう！」

とアヤノに手を引かれながら中央のほうへ人ごみをかき分けて行った。

見やすい位置へ来るとアヤノはそこに座り込み、長期戦の構えをとり私にも座るように薦めてきたので従うことにした。見やすい位置といっても集団対数人のようで私たちが座った所は集団の後ろ側だったため数名のほうは見えなかったが、戦闘が始まれば一番前の特等席であるここからはすべてが見えるようになるだろうと思った。

周りの野次馬たちは私たちのときと同様に「やれ！」とか「なかせちまえ！」等と無責任な野次を飛ばしている。中央では一瞬即発のようだがまだ戦いにはなっていない。最初は周りの声で聞こえなかった声もだんだん怒声となってきており、内容も聞き取れるように

なってきた。

どうやら数名のパーティーの仲間が手前の集団の仲間に出したらしく「早くつれて来い」とか「どこにいるか分からないし、分かってもそれはない!」とかのやり取りをしているようだった。手前の集団を見ていると横にいる野次馬ハンターが集団のことを『獵団・赤い怪鳥』と呼んでいた。最近出来たばかりの獵団で新人の最初に当たる難敵であるイヤンクックから名前を取ったらしいが、獵団員が人数の多さを影にあちこちで悪さをしていることと、その獵団長が上位のハンターであり団員の揉め事には必ず出てきて新人ハンターであろうが肅清という名の暴力を振るうことで有名らしかった。

そんな理不尽な話を聞きながら、いま絡まれているのも善人のハンターなら助けないといけないかなと考えながらアヤノのほうを見ると、座ったまま両手を頬に当てて子供のような期待をした目で中央を見ていた。

すると中央の方で野卑な笑い声が聞こえた。どうやら数名が探しているのは女性のように、その情勢を赤い怪鳥で捕まえ陵辱をしたと言う話になっていた。聞くに堪えないなと思っていると突如集団の前で乱闘が始まった。乱闘は数名のハンターに赤い怪鳥が押されているようで、後ろに下がってきたレイアシリーズの鎧を身にまとっている2人の男たちが部下たちに叱責を浴びせていた。数名のハンターは揃って赤い怪鳥イヤンクック装備を身にまとい迫り来る暴漢たちを素手で殴り飛ばしていた。

その中に褐色の肌をした大剣使いがいるのを確認した。

なぜマーティンがそこにいるんだろうと悩んでいると、

「良く頑張っているけど、そろそろ限界かな」

とアヤノが言った。中央での乱戦は序盤イヤンクック装備の3名が押していたが、赤い怪鳥の半分10名ほどを倒す頃に疲れが見え始め劣勢になってきていた。赤い怪鳥の方は上位ハンターと思われる団長と副団長の2人は無傷であり、戦いは終わりを迎えそうにな



っていた。

「おい！お前らちょっとやめろ！」

レイア装備をした大柄の片手剣使いが叫ぶと、部下たちはイヤンクツクのハンター達から距離をとり逃げられないよう円陣を組んだ。

「しかし、口ほどにもねえな。お前らの仲間は俺たちが美味しくいただかせてもらうぜ！」

と笑うと周りの部下たちも吊られて笑い出した。

「俺たちの仲間に手は出させねえ！マイアを返しやがれ！」

マーティンだった。遠くで見えづらかった事と赤い鎧を着ている事で今まで気づかなかったのだ。ということは彼らが捕まえて陵辱をしたと言うのは私のことのようなのだ。もちろんそんなことをされた記憶はない。マーティンたちに因縁をつけるために彼らが言った嘘という事になる。しかし、マーティンたちはそんな嘘は知らない。気づいたときには、一番後ろで笑っているレイア装備の男を・・・蹴っていた。

男は綺麗に放物線を描き列の一番前の男を通り過ぎマーティンの前に顔から落下した。

中央の集団、いや周りをとり囲む野次馬までもが静かになった。

マーティンが何がおこったか分からない顔でこちらを見ていのを確認した。マーティンだけではなくヒューイ、ギルスまでもが頬を腫らせ安堵の表情を浮かべたとき私の怒りが爆発した。

「私の仲間に何をする！」

咆哮し、そこにいる集団に襲い掛かった。

赤い怪鳥の団員たちもこの新人猟団では名の知れた存在であり、中には上位クエストにも行っている者もいたのだろうが、遅い。これが正直な感想だった。迫り来る男たちの手を、足を払いのけ最初に蹴り飛ばした団長らしき人間が気づいた時に中央で立っているのはマーティン、ヒューイ、ギルスと私だけだった。

「てっ・・・てめえら！赤い怪鳥を敵に回そうってんだな！俺たちはまだまだ数がいるんだぜ！次に会うときが手前らの死ぬときだ！」

と逃げ出そうとする団長をさえぎる影が動いた。

「テ・・・テンマ」

影はアヤノだった。

「赤い怪鳥・・・だっけ？私のことを知ってるんだ？たしか団長はファーガスだっけ？」

と腕を組み団長、ファーガスを睨み付ける

「あの子は私の連れなんだ。もう手出ししないでくれたら嬉しいな。」

「

「テンマ・・・レジェンド・テンマの連れ合いかよ！」

とファーガスは地獄の鬼にでも合ったような表情を浮かべ腰砕けに逃げていった。

そこで野次馬たちもアヤノのほうを見つめた後、アヤノの視線から逃げるように散って行った。

「あなたがマーティンね？マイちゃんから話は聞いてるよ。話どおりの熱血漢だね。」

その腕前ならすぐにでも上位にこれそうだね。」

と微笑みながら手を出すとマーティンは自分の手を鎧にこすりつけ泥を落としてからアヤノの手を握り返した。アヤノはヒューイとギルスとも握手を交わし、いい仲間を持ったねと話しかけてきた後

「強すぎる古龍は仲間から恐れられ、いつも一人。マイちゃん？」

貴女の力量は、その前のハンターランクである数字の分だから。

一人で悩まないで、何かあったら訪ねてきてね。」

と言に残し、喧騒の中へと姿を消した。

## アヤノ（後書き）

短文で申し訳ありません。  
不定期ではありますが、頑張って更新します！

## 変化

どうやらマーティー達に因縁をつけてきた猟団…赤い怪鳥は先に私とアヤノにやられた暴漢の仲間だったようだった。あれだけやられれば後の報復は無いと思った。たとえ勘違いとはいえ私を守ろうとしてくれようとした仲間たちを見ると、皆顔を腫らしていた。正義感が強く仲間意識の強いマーティー。少しキザったらしいけど片手剣の研鑽に対しては何時も真剣なヒューイ。寡黙なハンマー使いのギルス。最初この世界に疑惑と不安しか無い私にこの世界での生き方を教えてくれている仲間たち。足手まといになり、いつまで一緒にいれるだろうと思っていた仲間たちが自分を友として受け入れてくれていた事実には気づき涙が出そうになった。そんな私を見てヒューイが駆け寄り

「もう大丈夫だからね」

と優しく声をかけてくれたとき熱いものが頬をつたり、仲間と初めて意識した自分に気づき、信じようと誓った。

「無事でよかった!」

腫らした顔でマーティーが喜び私の手を握り激しく上下させた。

「どうやら何もなかったようだな。数日休んで次のクエストに行こう。休むところはいつも行っているマーティーのお気に入り娘がいる宿屋でいいんじゃないか?」

ギルスはマーティーを見てニヤリとし先頭を歩き始めた。

宿屋への道を歩きながらヒューイがマーティーの慌てぶりや最初に手を出したときの相手の表情、どうやって相手を倒したなどを身振りを入れながら大げさに教えてくれるとマーティーとギルスから笑いが漏れた。

そろそろ宿屋に着くだろう道を歩いていると先ほどのアヤノの話になった。

アヤノは一年ほど前に突然この新人キャンプに現れ、急成長しながら

らレジェンドと呼ばれる存在になったらしい。この新人獵団でイヤンクック討伐の最短記録をもつのは自分達だが、それはアヤノがイヤンクックより先にリオレイアを狩猟していたことが原因らしい。そしてアヤノがレジェンドと呼ばれる理由として彼女が1人で古竜を数度撃退している事実をギルドが認めたことを教えてくれた。「マイアもアヤノと同じ感じがしたな？」と言うマーティーの言葉は全力で否定した。宿屋につく頃には日が傾きかけており近くの酒場からは人の笑い声が聞こえてくる。不意にギルスが宿屋の入り口を開けると中から強い酒の臭いと共に喧騒が聞こえてきた。1階が酒場兼食堂になっていて、30坪ほどの広間いっぱいにはハンター達が食事や早い晩酌をしていた。宿屋の奥に階段があることからこの上が宿になっているのだろうと想像した。

カウンターまで進むとマスターが3人の顔を見て笑いながら話しかけてきた。

「おいっマーティー。最近のモンスターはキャンプの中にでるのか？」

「ああ。マスターも気をつけた方がいいぜ？ なんだってイヤンクックが群れをなして襲いかかって来やがったからな？」

マーティーが笑いながら返すとカウンターに座っているハンターが「キャンプに巣くっているモンスターに自分からかかっていったらいいじゃねえか？ しかも奪われたお姫様を助けにいったんだろう？ やるなマーティー！」

と声をかけてくると、お姫様に反応した数名のハンターが近くに寄ってきた。

「おい！ マーティー！ お姫様ってなんの話だ！？ 詳しく話してくれらんだらうな？」

と巨漢のハンターがマーティーの首に手を回し、逆の手に持っていた酒瓶をマーティーの口につけあおらせた。

「マーティーはこの人気者なのさ。さっ部屋はとったから先に休んだ方がいい。そうしないとマイアまで酒の肴なされちゃうよ。」

とヒューイが上に逃がしてくれた。

階段を上がる途中に酒場を見ると大勢のハンターの中で腫らした顔で笑いながら酒を煽るマーティーが見えた。あんなに腫らして酒なんて飲んだらと思ったが楽しそうにしている仲間たちを横目に2階へあがった。宿屋の部屋は4畳くらいで小さな窓と粗末なベッドがおいあった。着ていた鎧、レアルシリーズをひとつづつ外し窓の下に置いた後、鎧の下に來ている綿当てを脱ぎアンダーウェアだけの姿になった。

思っていたより疲れていたらしくベッドに横になると睡魔が襲ってきた。少し夢見心地のまま自分の体を見るとやはり、明らかにその姿が変わっていた。この世界に來て直ぐにクエストに向かったこともありゆっくりと自分の体を見たことがなかったが、改めて見ると軽い衝撃を受けた。

胸元には今まで在るはずもなかった双丘があった。大き過ぎず小さすぎず。さわってみると手のひらから少しでる感じでC位かな?と思うのと同時に今までは鎧の下にあったため見ないようにしていた。下の方も見ないようにしていたが、スッキリしてしまっていることを確認し本物なんだと痛感した。

とにかく今は休もう。みんなの腫れが引けてから次のクエストに行くことを自分から話そうと決め、睡魔に身を任せた。

## 変化（後書き）

引き続き頑張ります！

## 出 発（前書き）

携帯投稿のため誤字脱字がありますが、ご了承ください m  
┌ m



## 出 発

朝日が窓に差し込み目が覚めた。着替えをして下に降りると片づけは終わっているようだったが、まだ昨日の酒の臭い（もしかすると染み着いているのかもしれないが）が鼻をくすぐる。店の人は何時まで仕事をしていたのだろうと考えていた時にカウンター奥の厨房からマスターが出てきた。マスターと言ってもバーテンと言うより山賊：は言い過ぎだとしても、卒業した冒険者で元剣士でした。と言うような感じであり190cmはあろう巨漢の隆々とした筋肉と髭をもつマスターである。昨日の荒くれ共の中で酒場を開くならこういう人じゃないと無理なのかな？と思案していると

「おはよう！」

と大声で挨拶されたため、おはようございますと返事を返したが少し裏声になってしまった。

「昨日のお姫様だよな？」

「お姫様じゃなくてハンターです！」

マスターは強面の顔を崩して話をしてきたが、ついムキになって反論してしまっていた。

「へえ〜。」

俺あ女のハンターって言うのもムキムキマッチョのイメージがあるけどな。大方憧れとかなんだろ？」

「ムキムキマッチョってのは笑えるけど、これからそうなるかもしれないけどその時は無視しないでね？」

最初はムキになったが、そんな女性ハンターを想像して笑いそうになったため諦めて冗談で返した。

「嫁には貰ってやれねえが無視はしないぜ？ 気に入った！ 試して悪かったな。」

今までの意地の悪い笑いから晴れた笑顔になり、握手を求めてきた

ためその手を握り返すと不思議な表情で「おまえ…底が見えねえな…いや、本当に悪かった」

と剥げた頭を後ろ手にかきながら、ハンター辞めてここの給仕にスカウトしようと思ったんだけどなと笑った。

つられて笑いながら

「お払い箱にされたら泣きつきに来ますね？」

と言うと

「マツチヨになってなかったら囲ってやるよ？」

と言うマスターの頭にチリトリが飛んできて、

「馬鹿言ってんじゃないよ！早く仕事しなっ！」

と言いながらマスターの奥さんらしい背の低く整った顔立ちをして  
いるが、どこか凜とした若い女性が出てきた。

気にしないでねと笑顔で朝食を出してくれた女性を見て、「女性って怖いです」思ったが、いまだ床でうずくまっているマスターを見て声には出せなかった。

かるい朝食を終えたとき丁度マーティー、ヒューイ、ギルスの3人が降りてきた。3人とも昨日より顔を腫らしており、マーティーに至っては右目が見えないのではないかと思うくらい瞼が腫れていた。

3人に「おはよう」と挨拶し、テーブルに移り食事をしながら話をしている仲間を微笑みながら見ていると、ギルスが強化に必要な鉱石を取りに行きたいと言い取りあえずランポスでも狩りながら集めようという話になった。

食事が終わってから準備をしてギルドへ出発するからと言われ部屋へ戻ったが、どうしても気になるのでマーティーの部屋へ行った。

マーティーの部屋も私の部屋と同じ位の広さであったが、下着とかが散乱してるのを見てアパート契約してるのかな？と首を傾げると、マーティーが慌てて部屋を片づけ始めた。

「ノックくらいしてくれよ！？」

と悲鳴の様な抗議をして来たため、ごめんねと誤った。

「でっ、何の用だよ？まだ準備は出来てないんだろ？」

まだ鎧も着ておらず部屋着で訪れた私にマーティーは目も合わせずに聞いてきた。私は無言でマーティーに近づき…

マーティーの顔を手で触れた…うん折れて無い。一番怖かったのは眼底骨折であったが、ただの内出血らしく血を抜けば目は見えるようになりそうだと触診すると、なぜかマーティーの顔が真っ赤になっ  
っていた？

「マーティー風邪？」

「いきなり何すんだよ！」

と怒っている？ので目を見えるようにしようと思って触診したと告げると、ホッとしたような苦虫を噛んだような不思議な表情をしたが、マスターから貰った酒をかけて借りた応急セットから小さいナイフを取り出し瞼の上の患部を切り、血を抜いたあと塗り薬を塗って置いた。たぶん3日もすれば塞がるからと伝えたと驚きながら喜んで  
いた。

自分の部屋に戻り携帯食料やアイテムをリュックにつめ、準備が終  
わる頃にヒューイに呼ばれ下に降りた。

「さっギルドに行こうぜ！」

先頭を立つリーダーの瞼の腫れが引いているのを見て安心しながら  
後ろを付いていった。

## 鉾石とランポス（1）（前書き）

大変遅くなりました（^^；）

## 鉱石とランポス（1）

今回は採取もあるため道具屋に寄りピッケルを購入していく事になった。ピッケルは鉄製のようであったが、その作りは荒く粗末でありツルハシの先端は何度か使うと刃先が曲がるか折れるかしそうと不安になる品物だった。ヒューイの話によると、この上のピッケルグレートと言う良品もあるが中々手に入らないと教えてくれた。

道具屋を後にしクエスト発着場に行き、どの竜車かな？と見ていると偶々前にお世話になった竜車が空いていたことから「この子がいい！」とついワガママを言ってしまったが、ギルドの派遣員である木の良さそうなおじさんは笑顔で了承の旨を伝えてきた。優しい顔をしたアプノトスに「また頼むね」と言いながら頭をなでると嬉しそうに甘えてきた。

そして再度密林へ向かうことになった。

前回来たときは不安や期待で一杯だったため気づかなかったが、落ち着いて密林を見てみると亜熱帯地域の様であり神秘的なものを感じた。しかも車の排気ガスが混ざった空気が当たり前だった私にとっては『空気ってこんなに美味しかったんだ』と感じさせられるものがあった。

ベースキャンプに着いたときには太陽が沈みかけてきており、夜の密林は危険と判断し日が昇ってから探索を行うことにした。

夜の密林は元いた世界のように電灯等がないため満天の星空を眺めることができた。自分の知っている星座はないか探してみたが、そんなに詳しくなかった事と星が多すぎて分からないことから断念し諦めて純粹に星空を楽しんでいるとギルスがこちらに向かってきているのが目に入った。

「星がそんなに珍しいのか？」

言いながらギルスは私の一步隣に腰を下ろし手に持っていた果実酒

を薦めてくれた。

「うん、とてもね。」

空気が澄んでいるからとても綺麗だし、こんな綺麗な星空を見たのは初めてだから。」

と薦められた果実酒に口を付けた。果実酒はパイナップルの様な味をしたがギルスの地方で取れる果実を使っているらしく、形を聞いたがパイナップルではないと思った。

「自信を持つことだ。」

そして俺たちを信じろ。

お前は自分が思っているほど弱くはない。お前の動きだけを見ていれば、それは熟練のハンターの動きになっている。足運び、呼吸、武器の扱い方。それは忘れたのか思い出したいくないのかは分からないが、俺たちが保障する。

頑張れ。」

と短く語り手に持っていた果実酒を一気におおると少し酔っているからなと言い、立ち上がり寢床へと向かっていった。そんなギルスの思いに

「ありがとう！」

と叫ぶとこちら向かずに右手だけを上げて答えてくれた。

朝目覚めるとこの世界に来ていて、気づいたら自分のキャラになっていて容姿も性別も変わっていた。知っている友人などはもちろんいなく、もといた世界に戻るための方法も思いつかず、どうしたら嫌われないか？自分は不自然じゃないか？自問自答していた私にギルスは「俺たちを信じろ」と言ってくれた。もう自分を偽らないで行こうと決めたときに口に運んだ甘い果実酒がなぜか塩辛かった。

満点の星空も東から上る朝日に消され小鳥のさえずりの声で目が覚

めた。気づくと昨日星を見ていた場所で寝てしまっていたらしい。体の上にかかっていた毛布は誰かが気を使ってくれた証拠だろうと思ひ、みんなが寝ているところへ行くと3人ともまだ寝ていた。

3人は各々好きなように寝ていたが、マーティーだけが毛布を掛けていなかったためそつと貸してくれていた毛布をマーティーに掛け朝食の用意をすることにした。

この世界ではハンターは朝食をとることが少ない。手に持ってきているのが携帯食料であることが原因であると思った。幸いここは密林ということもあり、エリアを変えればキノコくらいは生えているだろうと一応念のためを思い愛剣エンドブレーカーを背負った。最初は鎧もと思ったが、着る時の音で仲間が起きるかも知れないと思ひ、そのまま行くことにした。

昨日密林に着いたときに思ったよりも朝の空気は美味しかった。一応背伸びと屈伸をして準備運動をしてからキノコ探しにあるいてみると、モスを発見した。モスとはもといいた世界的に言うとう食用の肉にも使われている豚のような存在であり、背中にキノコなどが生えているモンスターである。モスの好物は特産キノコのため、モスがいるところを探せばキノコが発見できる。と、ゲームの中で誰かが教えてくれたことを思い出し、そつと近づきモスがキノコを食べているのが見えた。リアルで見るモスはどこか愛嬌があったが、これからハンターになると決めた自分に言い聞かせモスをエンドブレーカーの斬り下ろしで一撃で仕留めた。倒したモスに剥ぎ取りナイフを入れ丁寧肉と骨を解体し、近くにあった特産キノコを採りキヤンプへ戻った。

仲間が寝ているのを横目に火を起こし、持ってきていた鍋を加熱し新鮮な肉と特産キノコを炒めることにした。肉がいい頃合に焼けてきたときに調味料代わりに海水を一振りかけると香ばしい匂いが出てきて、米があればなあ等と考えてしまった。

匂いと音につられたのか3人が目を覚ましたので、用意した朝食を見せるとすごく喜んで食べてくれた。

「ベースキャンプで朝飯が食えるなんて思ってなかったぜ！  
肉とキノコ持ってきてたんだな！？」

と肉を頬張りながら聞いてくるマーティーに笑顔だけを返して「まあね。」とだけ答えると、ギルスがこっちを見て

「やったな。」

と短く笑ってくれた。

食事を終わると

「さあ準備だ！」

というリーダー・マーティンの掛け声で全員が各々の武器と防具を身につけた。

「もう怖くない」

小さな声でつぶやき自分を激励し本当のハンターへの道を一歩進み始めた。



## 鉱石とランポス(2) (前書き)

しばらくぶりの更新になります。

文章は少ないですが、時間を作ってまた投稿しますので応援をお願いしますm (´`´´) m

## 鉱石とランポス（2）

朝食を終え各々防具を着込み武器の手入れを行う。自分の命を守る物だから、必ずチェックをしておくように言われたため皆に習い自分の装備のチェックを行う。マーティ達の防具は先日狩ったイヤンクックの防具であり、怪鳥の赤い鱗を加工した物で鱗や甲殻を紐のようなものでつなぎ止めている。武器は粗末な鉄製の物であり切ると言うよりは『叩く』物にも見える。夜の間にヒューイの片手剣を見せてもらったが、頑張れば切れると言った物だった。彼らが言うには上位のモンスターの素材から作る武器は切れ味が凄く良い物もあるらしい。片手剣は切れ味が重要であり、いつかは自分も剛種武器と言われる最高の切れ味を持った武器が欲しいと語っていた。私が持っているのは『エンドブレーカー』と呼ばれる大剣であり、飛竜種と戦うのが好きだった私は好んでこの大剣を使っていたがまさか実物を持てるとは思ってもいなかった。

その大剣の刀身は黄色く、光を浴びると輝きを増し己の持つ龍属性とその切れ味を強調していた。防具にしても胴体、腕、腰、足はリアルキットの純白であり、ゲーム通りだとランナー、龍風圧無効、高級耳栓が常用スキルとして備わっているはずで、頭の赤い髪留めは最近気づいたがどうやらSP防具のエスピナキャップであることが分かった。おそらくいま発動しているのは攻撃力大、見切り3、火事場2、業物1、ランナー、高級耳栓、龍風圧無効だろうと思うが、はたして珠という概念があるのかも疑問であった。マーティ達の防具にそれらしい物は見あたらず、会話の中にも出てきていないからだ。

そんなことを考えているうちに準備も終わり、出発をすることになった。

マーティの気合いのかけ声に応じエリアを移動する。途中蟹の怪

物ヤオザミを横目で見ながら「美味しいのかなあ」などと考えながら、今度時間があったら捕まえてボイルにしてみよう等と考えてたりした。自分で思っていたより早くこの世界に順応している自分に驚きながらみんなの後を追うと気づいたのだが、ランナースキルがあるのかは分からなかったが自分が他の人よりスタミナがあり事が分かった。

更に移動をし今回の目的である洞窟内部へ入ると…そこは断崖絶壁だった。

「まさかこれを降りるの？」

と聞くと普通にそうだよと誰かが言う。

いやいや、ちょっとまって5mはあるよね？ 掴むところもないみたいだし…。恐る恐る下をみていると身軽なマーティとヒューイがお先につと言いながら下に降りていった。二人ともショックを膝でよく吸収し無事着地したようだが、正直高いところが苦手な私はそれを惚けながら見つめていると

「いいから早く降りろ！」とギルスに

『背中から押された！』

5mの高さから落下しながら、やっぱりこの世界が夢であればいいののに願わずには射られなかった…。

### 鉱石とランポス（3）（前書き）

またまたお待たせしました。  
お正月休みにまた書きます。

### 鉾石とランポス（3）

私は今落ちていた。

5 mはあるかと思われる崖の上からギルスに突き落とされたのだ。通常10 mの高さから落下した場合体の一番重い部分である頭がしたになると言われているから5 mなら逆さまで落下することはないはずだけど、今の私の体重が50 kg弱だとして武器と鎧で軽く見積もって150 kgの合計200 kg。高さ5 mから自由落下して9・8 Nを掛けるから9・8 t o n：約10 t o nの衝撃がかかる計算になる。時間にすればあつという間のはずなのになぜか冷静に計算をしてしまう。

地面が近づいてきたなあ、やっぱりコレ夢だよね？

とか考えていると

ズガッ！

と地面をえぐる音と共に着地した。

まるで何度もそれをやっているかのように、自然にショックを膝で吸収していた。

あまりの突然の出来事で惚けていると後から降りてきたギルスに背中を叩かれ

「いくぞ」

と短く激励され、自分で理解できないままついていった。

最初は洞窟かとも思ったが所々空が見えており明るさには十分に思えた。

その後もう一度（今度は10 m以上はありそうな）崖を飛び降り。。

。と言うより突き落とされ、目的であった鉱石の発掘場所に着いた。鉱石の発掘現場なんて自分の目で見たことはなかったが、目の前に広がる採掘場は神秘的だった。崖に無数の鉱石柱とでも言うのだろうか、それが突き出ていた。色とりどりであまりの色合いに驚いていると先に衝いていたマーティたちがピッケルを持ちその柱から鉱石を発掘していた。

ギルスも自分の背囊からピッケルを取り出したので、私も見よう見まねで採掘を始めた。

30分も採掘をすると背囊の中は鉄鉱石やマカライト鉱石などで一杯になった。

「ところでランポスはいないの？」

と訪ねるとマーティが思い出したように

「いつもはここに結構いるんだけどなあ？」

と言いながら仲間を見ると皆怪訝な顔をしている。

「そういえば上位のハンターから聞いたことがあるんだけど、ランポスやファンゴとかが居なくなってるときは気をつけろって言われたことがある。」

とヒューイが言葉を放った。それはとても重々しく口から言葉がやっとなったという感じであり、先ほどの嬉しそうな表情は一変していた。

言葉を振り絞るような声で

「逃げよう

飛龍がくる…」

と言った。

パーティーの知恵袋的なヒューイの発言を聞きマーティの号令下背

囊をまとめ、慌ただしく帰還の準備を始めようとしたとき

なにか大きな羽ばたきの音が聞こえてきた。

その何かは欧州の神話で語り継がれて居るものであり、全長6m、体調3m程の存在は万物最強と謡われた伝説であった。そう自分がやっていたモンスターハンターの中で最初に戦った飛龍であったが、その存在感は決してモニター越しには伝わってくるはずのない物であった。

「陸の女王リオレイア！」

悲鳴のようなヒューイの声と共にパーティーが逃げることを諦め武器を手取る

「リオレイアが居るなんて聞いてねえぞ！」  
叫ぶマーティに

「マスターも知らなかったんだろう」  
とギルスはハンマーを構える。

そして陸の女王が大地におり

こちらに威嚇の砲攻をし、仲間が耳をふさいでいる中私は愛剣エンドブレイカーを構え正直に

美しい

と思っていた。

## 鉾石とランポス（4）

大地に降り立ち地震の存在を咆哮で誇示している陸の女王から見た私たちの姿はどう映るのだろうか・・・？全長6mの巨体から見れば私たちなんて小さな生き物のはず。しかし、この陸の女王に勝つことが出来る人間は数多くいる。前に出会った『アヤノ』はイヤンクックより先にこの女王を倒したとも聞いていた。自分がそうなるかは分からないが、この女王に恥じない戦いをしようと決意をした。

目の前に恐怖があった。昔子供の頃に出会ってしまった死の風を運んでくる怪物が。

あの時は片手剣のレジェンドが助けてくれたが、今はもういない。自分があこがれて追いつこうとしたはずなのに、恐怖で体がまったく動かなかった。

みんな先日の戦いで武器も防具も強化されていた。安物の鎧からイヤンクックの防具へ、骨の武器は粗末だけど鉄の武器へ。しかし、この龍は違う。自分たちは『まだ』あってはいけない怪物なのだ！逃げなくては・・・自分がこのパーティーの頭脳なんだから。今咆哮の魔術から目を覚まし始めた仲間たちがあの女王へ手を出す前に！

「力の限り逃げろ！！」

ヒューイはありったけの声を振り絞り叫んだ！

『力の限り逃げろ！』

怒鳴り声で裏返ってはいるが、この声はきつとヒューイだろうと



思った。その声の後後ろで武器を畳み走り出す音が聞こえる。女王を目の前にして後ろを向くと言うことはきつと危険だと思った。

思っている途端に目の前の巨体が信じられないスピードで向かってきた。後ろには仲間がいる・・・とっさにエンドブレイカーを盾にし踏みとどまろうと決意をする。

ドン・・・

信じられない衝撃が体にぶち当たってきた・・・が、陸の女王はその大剣をはじくことが出来なかったらしい。すかさず横薙ぎを入れ足を狙う。しかし読まれていたらしく、リオレイアは数歩後ろに下がった。後ろに逃げたなら追跡を！・・・と思ったときにいやな予感が脳裏を横切った。

信じられない光景を見ていた。同じ大剣使いである少女が陸の女王リオレイアの突進を『止めた』のだ。今までの先輩ハンターの話を聞いていると、「飛ばされた」「耐えた」は聞いたことはあるが、『止めた』は聞いたことが無かった。たしかに、あのまま突進されていたらもう全滅していただろう。しかし、彼女は素人だったはずだった。考えるのは逃げてからにしよう。そう考えたマーティは少女に向かって叫ぼうとしたときリオレイアが膝に力を溜め、次の瞬間まるで上空に満月を描くかのような縦回転をした。

頬の横を女王の毒の尻尾が通り過ぎていく。危なかった・・・「思い出した」のだ。モンスターハンターのリオレイアはムーンサルトと呼ばれる縦回転の尻尾攻撃をするとき、体が1歩下がり一瞬屈伸するのだった。その攻撃力は凄まじく下級の防具程度ならば一瞬で乙る（死亡）するものであった。

そして私はゲームのなかでこの攻撃をかわしたときに必ず、こうしていたのだった。

溜め4を振り切り

自慢の攻撃を外された女王は不機嫌に降りてきた。いや降りてくるはずだった。

地面に降り立ち炎のブレスで焼く尽くすはずだった。

地面から一閃。なにか反射した光が陸の女王リオレイアが最後に見たものだった。

ドオオオオオン・・・

と言う衝撃が広がった。きっと仲間が女王に攻撃を受けたのだろうか。罪悪感から音の出たほうを見ると、なぜかリオレイアが地面に横たわっていた。その女王の前に伝説に出てくるであろうか威風堂々とした格好で大剣を構えている仲間。マイアがいた。

喜ぶはずの場面でなぜか、憎悪が生まれた。

マイアがリオレイアを倒した。それはいい。しかし、残りの2人は受け入れられないらしく呆けている。何が起ったかわからないマ―ティーはともかく、ヒューイにいたってはその目によくない光が灯っていた。

「すむ次元が違う・・・か」

つぶやくギルスに緊張感の解けた少女が涙目の笑顔で飛び込んできた。

たとえ離れ離れになろうと護ってやらないとな・・・と考えながら、話べたの自分がどうやって仲間を説得するか苦労しそうだった。

## 鉱石とランポス（4）（後書き）

文章の難しさを痛感しますorz

頑張りますので、応援お願いしますm  
〔  
m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4199v/>

---

モンハンの世界？

2011年12月29日21時50分発行